

- 1.研究題目：新しい日本語教育教材開発のための調査・研究
- 2.研究内容：日本語教育の今後の発展に寄与するため、これまでの教科書を中心とした教材を精査したり、学習者に対するアンケート調査を行ったりするなど、各研究担当者の課題を具体的・明らかにしつつ、より新しい教材開発のために調査及び研究を行い、結果を分析した上で成果をまとめる。
- 3.研究期間：平成 28 年度分は、平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日
（総研究期間としては平成 27 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日まで継続）
- 4.第 2 回中間報告（1,310 字）

本チームにおいては昨年より引き続き、複数の研究者が共通テーマで研究を行っている。

まず 1 つの研究は、学習者が教科書で学ぶ新出語彙の定着のしにくさ、また、学習者がどのような語彙を「難しい」と感じるかを探ることに研究の中心を若干移し、学習者が教科書の単元を学んだ直後に書いた作文にどのような語彙が現れやすいかといった面を探る用例を収集し、分析を続けるとともに、学習者の主観的に感じる「覚えにくさ」「覚えやすさ」をアンケートで調査している。それと同時に、学習者がどこでつまづいているのか、どうすれば覚えやすく、新しく習った言葉を使いたいという動機付けを高めることができるのか、通常の学習者と遅延気味の学習者とではどう違うか、SNS を通じたアンケートで幅広く学習者の意見を集めている。最終的にはこの研究の成果を、学習者が自学自習に用いられる語彙学習教材の開発へと結びつけることを目指している。

次の研究では、日本語を使う場面情報を、留学している大学生からアンケートと面接、そして日本人大学生からはアンケートによって収集し、分析をしている。まだ分析過程にあるが、分析結果は徐々に明らかになってきている。日本人大学生（5 人）は 1 週間に平均 11.8 回先輩か後輩との会話を持ったが、留学している大学生（12 人）の場合は先輩や後輩との会話の 1 度もなかった。留学生にとって先輩・後輩の扱いが難しいとされている（黒羽 2008）ことから、先輩や後輩としての会話の機会を増やすことによって、留学生の学習に有益に働くことが予想される。今後インタビューを定性的に分析し、留学生の先輩・後輩との会話の機会を増やす方策を提案すべく、検討するところである。そしてアンケートのデータをさらに定量的に分析している。

また別の研究では、近年、特に 2000 年以降に出版された中国における日本語教材を中心に、教材開発のために活かせるよう、学習指導項目やその指導過程・順序、教育内容・題材とその扱い方、教材構成などを精査・比較し、さまざまなデータを集約・分析している。『総合日語』と『基礎日語総合教程』を中心に 6 種類の教材を比較検討し、収録語彙の量、品詞、カタカナ表記、文化に関する語彙の処理の特徴を明らかにする。

また次の研究では、4 種類の日本語初級精読教科書を調査対象とした人称「あなた」の取り扱い方を精査している。そこでは、学習者が「あなた」を中国語のどの人称に対応させて解釈し、またそれ以上の深い理解がないままに使用している実態を示す。さらに、日中両言語の人称比較を通じて、相違点を明らかにしつつ、中国人日本語学習者にみられる人称の誤用のメカニズムを探る。

さらに、研究者が中国で共作・出版した教科書『総合日語』の執筆過程において、議論のあった日本語表現や内容（特に語彙と配列、その他教材作成のストラテジー等）に関する課題を整理・分析し、教材開発に有益な知見を提案したい。また、欧米学習者の日本語プレゼンテーションに見られる語彙データを元に、その傾向や教材語彙との違いを分析する。中国人上級学習者にもその語彙の理解度を調査し、日本語の語彙教育における課題を探る。